

近世の往来物・書札礼における助数詞について

三 保 忠 夫

はじめに

日本語における助数詞は、和文資料や訓点資料などよりも、文書資料および、記録資料との関わりが深いようであり、従って、その用法や意義、また、性格や本質などは、こうした方面において究明されていくのではないかと推測する。

文書資料とは、公私の書類、即ち、「古文書」といわれるものとはほぼ重なる。古代の宮城趾出土の木簡類から近世の去り状や遊女の起請文などまで、かなり広範囲の文字資料が含まれる。助数詞との関わりは、そのすべてにおいて認められるわけではないが、中には、助数詞を不可欠とする書類も存在するようである。助数詞研究は、これらの分析により、一段と進展していくことが予測され、そうした日本の用法の、よってきたところ（源流）の究明も可能となるように思われる。

古文書は、多く「様式」によって規定されている。公式様文書、公家様文書、中世・近世の武家文書、また、上申文書、証書類など、これらのほとんどは一定の様式や発給手続きに従うものである。公文書に対す

る私文書の性格の濃い書状の類においても、程度の差こそあれ、やはり、基本的には同様である。これらの様式については、奈良時代の公式令、また、有職故実書としての西宮記や北山抄、江家次第など、文書の用例集としての雲州往来、消息耳底秘抄、書札抄、朝野群載、雑筆要集など、その解説書としての弘安礼節（弘安書札礼）、沙汰未練書、室町家御内書案、細川家書札、その他の書札礼などに詳細がみえている。文書の用例集としては、庭訓往来や雑筆往来、その他、「往来物」の果たした役割も大きい。近世に入ると、利用者（読者）層の拡大、出版という供給手段の改善などにより、書札礼・往来物の類は飛躍的に増加する。これらは、書状の各種の様式・書式、また、国語表現や語彙・文字等の学習、さらには、百科的知識の習得などを目標とするものであるが、公・武・庶など、社会のあらゆる階層に多大の影響を与えたという点で、決して看過できない存在である。

古文書における助数詞の研究は、個々の文書資料に依拠する方法も大事であるが、他の一として、こうした文書の様式（集）、また、それを解説する形の書札礼に依拠する方法も可能であろう。個々の文書は「現

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

実”であり、様式(集)や書札礼は、いわば“規範”であるといつてよいであろうか。実際に取り交された現実(実情)をふまえることも必要であるが、今ひとつ、それらを律していたとみられる文書の様式・書式、また、故実・礼法などを視野に入れておくことも大切であろう。

本稿では、こうした趣旨のもとに、近世の書札礼を取り上げ、それらにおいて言及されている助数詞について検討したい。近世における書札礼は、往来物といわれる書簡模範文例集に併載されることが少なくないので、本稿標題には、往来物・書札礼と併記した。

本稿に取り上げる資料は左記のものである。資料により、そこで言及される助数詞には多寡があるので、便宜上、次の二様に分けて検討する。

一 A群 ことさら助数詞について言及するもの

- (一) 書札調法記 元禄八年(一六九五)刊
 - (二) 文林節用筆海往来 享保四年(一七一九)刊
 - (三) 萬物用文章 安永年間(一七七七)成
 - (四) 永代重宝記 元禄八年(一六九五)成、天明七年(一七八七)増補
 - (五) 御家書札大成 弘化二年(一八四五)跋
 - (六) 大成筆海重宝記文章藏 寛政九年(一七九七)刊
 - (七) 大諸礼集 刊年未詳
- 二 B群 助数詞についての解説は少ないが、やはり、注目される資料
- (一) 礼式書札集 延宝三年(一六七五)刊
 - (二) 字林用文章宝藏 安永八年(一七七九)刊
 - (三) 萬代用文字宝大全 十八世紀後半刊

(四) 弓勢為朝往来 文政六年(一八二三)刊

以下、右について検討し、助数詞を抽出していく。なお、前稿に扱った女文通宝袋文化十五年(一八一八)刊本の場合はA群に相当するものである。

(注一) 拙稿「近世の往来物・書札における助数詞の考察——『女文通宝袋』について——」、『国文学攷』第一三八号、平成五年六月。

一 資料A群

(一) 書札調法記

元禄八年(一六九五)初版刊行、六卷三冊、著者中村三近子(中村平吾)、往来物の一種とされ、種々の文書や帳簿等の書き方、語句や文字等の用法や故実などについて解説する。「手本重宝記」「手本調法記」「書札重宝記」の別名がある。『近世文学資料類從 参考文献編5 書札調法記』(近世文学書誌研究会編、長尾高明解説、昭和五十一年三月、勉誠社刊)として左記の国立国会図書館蔵本の複製が刊行されている。

『国書総目録』(岩波書店刊)、『古書籍総合目録』(同上)、および、右解説によれば、版本として左記があげられている。

- (一) 元禄八年(一六九五)版
- (1) 国立国会図書館蔵本(「新書札調法記」、六卷三冊)
- (2) 京都大学蔵本(古文書室蔵か)
- (3) 石川謙氏蔵本
- (4) 弘前図書館蔵本(巻五・六存、二冊)
- (5) 東洋大学図書館哲学堂文庫蔵本(六卷三冊)

- (一) 元文五年(一七四〇)版
- (6) 米本図書館蔵本(巻五・六存、一冊)
- (7) 鹿沼市立図書館大櫛文庫蔵本(巻三、六、二冊)
- (8) 無窮会図書館神智文庫蔵本(巻三、六、二冊)
- (三) 明和四年(一七六七)版
- (9) 玉川大学図書館蔵本(六巻を一冊とす)
- (10) 牧野図書館旧蔵本(新城市立新
城中学校内)(六巻三冊)
- (11) 前田金五郎氏蔵本(六巻三冊)
- (12) 東京大学文学部国語研究室蔵本(もと三冊、今一冊)
- (四) 天明三年(一七八三)版
- (13) 東京教育大学図書館蔵本(六巻三冊)
- (14) 東京大学総合図書館蔵本(六巻三冊)
- (15) 広島大学蔵本(戦災で焼失)
- (16) 京都大学文学部古文書室蔵本(二冊、現在所在不明の由)
- (五) その他(刊年未詳等)
- (17) 通信博物館蔵本
- (18) 東京教育大学蔵本(巻一、四、二冊)
- (19) 東北大学図書館狩野文庫蔵本(二冊、現在所在不明の由)
- (20) 豊橋市立図書館蔵本(巻一、三を一冊とす)
- (21) 玉川大学図書館蔵本(巻一・二存、一冊)
- (22) 文楽協会山城少掾文庫蔵本(一冊)
- これらの内、調査を終えたのは、(1)・(8)・(9)・(12)・(13)・(21)の六本である。(15)は、疎開が間に合わず戦災で焼失したとされる(同大学附属図書館の説明)。「近世文学資料類従」の解説でも、(1)・(5)・(6)・(10)・(11)・(12)・

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

(13)・(14)・(20)等についての書誌解説、整理が行われているが、閲覧したところを略述する。

- (1)の国立国会図書館蔵本(191-390)の書誌は次のとおりである。
- 外題 「新書札調法記 文章替字
一(三)」(原題簽、左肩、双郭)
- 内題 なし
- 首題 (凡例の首)「手本重寶記凡例」(一オ)
- 巻数 六巻三冊
- 残欠状況・保存状況 可
- 柱刻 「手本重寶記」 中央部巻数「巻之一」(一六)
- 魚尾 黒 双 皆下向 書口 白口
- 本文用字 漢字 平がな付訓 画 なし
- 寸法 表紙・半紙本 縦二一・二センチ 横一五・九センチ
- 題簽 匣郭 縦一六・三センチ 横三・〇センチ
- 本文 匣郭・四周単郭 縦一八・一センチ 横一三・七センチ
- 表紙 原表紙 色濃紺・無地
- 紙数 巻一 三九丁、巻二 二五丁、巻三 三〇丁、巻四 三三丁、
巻五 二七丁、巻六 二四丁
- 刊記 「元禄八^乙 亥 稔正月吉辰」(巻六、三四丁ウ末尾、上部)
- (8)無窮会図書館神智文庫蔵本(五八四二)は、六巻の内、巻一と巻二とを欠く二冊本である(もと三冊本)。元文五年の刊記がある。
- 外題 「新書札調法記 文章替字
二(三)」(原題簽、左肩、双郭)
- 目録題 「手本重寶記卷之三目録」
- 柱刻 「手本重寶記」 魚尾 黒 双 皆下向 白口
- 寸法 表紙・半紙本 縦二一・七センチ 横一六・一センチ

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

題簽匡郭 縦一六・八センチ 横二・九センチ
 本文匡郭・四周単郭 縦一七・七センチ 横一三・七センチ
 表紙 原表紙 色紺色 書入 なし 一面(半丁) 九行
 紙数 卷三・三〇丁 卷四・三二丁 卷五・二七丁 卷六・二四丁
 蔵書印 「無窮会／神習文庫」

刊記(郭あり)

元文五年	梶川七郎兵衛
申 五月吉日	植村藤左衛門
中村平吾三近子述作書目	中村治郎兵衛
六諭衍義小意	西村市郎右衛門
年中用文章	西村清右衛門
筆海俗字指南車	藤澤三郎兵衛
筆用文林福寿蔵	梅井藤五郎
兎戯笑談	中川茂兵衛
一代書用筆林宝鑑	磯嶋宇右衛門
書札字尽大全	一冊
	一冊
	五冊
	一冊
	一冊
	五冊
	一冊
	一冊

本書は、元禄八年版の重版で刷りが悪く、よく読めないところがある。(9)の玉川大学図書館蔵本(Ms5285, WAI4-チ)も元禄八年版の重版である。六巻一冊。但し、原装三冊本を後に改装したもの。表紙後補。凡例の首、柱刻は右と同じである。本文末の刊記も同じであるが、この次の丁(裏表紙見返しに附加した半丁)に左記がある。

刊記 「明和四年丁亥九月吉日

梶川七郎兵衛
 植村藤左衛門
 中村治郎兵衛
 西村市郎右衛門
 西村清右衛門
 藤澤三郎兵衛
 皇都書肆

中川茂兵衛

元文五年版には、「中川茂兵衛」の前・後に「梅井藤五郎」「磯嶋宇右衛門」の名があるが、この版にはそれがない。惜しまれるのは、巻五の三六丁の一丁(オ一行目ウ九行目)を欠落し、問題とする「十九衣服并魚鳥詞づかひ」のほとんどを失っている点である。これは、思うに、その「……詞づかひ」(助数詞用法を説く)を単独で用いるべく、故意に切り離したものであろう。

(12)の東京大学文学部国語研究室蔵本(Ms 7 B・75、196736)は、右の(9)と同一版である。原三冊を改装して一冊とする。巻一には原表紙(紺色、無地)をとどめ、(1)の国立国会図書館蔵本と同様の題簽(原題簽、左肩、双郭)に「新書札調法記 文章替字」とある(上部虫損)。三四丁ウ末尾の「元禄八……」、三五丁オの「明和四年……」の刊記、その他、(9)に同じ。後掲の「衣服并魚鳥詞づかひ」、その他は所見する。朱印「東京大学図書館印」。

(14)東京大学総合図書館蔵本(E286/163)は六巻三冊本で、天明三年の刊記がある。外題(原表紙、原題簽、左肩、双郭)、首題(凡例の首)、柱刻、魚尾、書口などは、(1)国立国会図書館蔵本に同じ。

巻六、三四丁ウ末尾、上部に「元禄八^乙 亥 稔正月吉辰」とある他、

左記のようにある。

刊記 「天明三年癸卯九月吉日

梶川七郎兵衛

丁字屋庄兵衛

錢屋庄兵衛

西村市郎右衛門

武村嘉兵衛

藤村治右衛門

中川藤四郎

柱刻に「手本重宝記」、卷二尾題に「手本重宝記卷之二終」ともあるが、凡例の首に「書札重宝記凡例」とみえる点が変わっている(傍点私意)。卷三以下を欠くのは遺憾である。さて、助数詞研究上、本書に注目されるのは、卷五に左記の一節があるからである。この目次には「十九衣服詞づかひ」とのみあるが、該当の箇所には次のようにある。

翻字凡例

(1) 国立国会図書館蔵本を底本とする。但し、文字の不鮮明な箇所については他本を参照することがある。

濁点の施し方に不審があるが、版本のままとする。

私意により丁数、行数を付す。

印刷の都合上、底本に割書きの条、また、右寄り小字の条は〈〉印の内を示すこととする(以下同様)。

／印は底本に改行あることを示す(以下同様)。

この刊記(左半分)の右側(右半分)に、元文五年版の奥と同様の「中村平吾三近子述作書目」七点が掲出されている(書目・冊数は同じ)。

右は、岡村金太郎蒐集「往来物分類集成」マイクロフィルム版による。

(2) 玉川大学図書館蔵本(No.5367, WAIG)は、卷一・二の一冊のみの零本である。外題は、表紙に直に「手本重宝記 卷一、二」と手書きされている。寸法(半紙本)その他、これまでのものに大同である。

〔翻字文〕

35ウ7

〔丸衣服〕并魚鳥詞づかひ

8 冠(一飾) 烏帽子一頭 裝(装) 束(二領) 一對 直衣 狩衣一具

9 立付肩衣袴(また上下一領共)一具ともいふ也 呉服(またハ小袖)一重とも 拾 単物 帷子

36才1 細美 羽織 道服 雨合羽 被衣 布子 夜着 汗 蚊帳(また蚊帳)一張 帯一筋

2 高宮嶋 薄団 帳(このるいハ)皆一ツと云 蚊帳(また蚊帳)一張 帯一筋

3 頭巾 綿帽子一頭 枕(一ツ) 革袴(一襲) 足袋(二足) 綿一

4 把 実綿一斤 金欄 薄衣 鈍子 縷子 縷珍

5 縷子 光縷子 縮緬 流文 綾 紗綾 天鵝絨(此るい)一卷

6 羅紗 羅背板 猩々皮(此るいハ何)間といふ 毛氈(氈)一牧(枚) 羽二重

近世の往来物・書札札における助数詞について(三保)

4 とも一筐いっくわんともいふべし 曲物まげものに入たるを一曲ひとまげといふへし／
 (注) 難字について——37オ3「□」の偏は難解、旁は「鳥」、37オ9「□」は二字とも魚偏、旁は難解。

本書には、右の他にも助数詞用法を説くところがある。例えば、巻五、

八オ、「±折紙せりかみ目録めくろく書様」に、

御太刀 一腰 国光

御馬 一疋 月毛 「(八オ)」

御太刀 一腰

金子 三百枚

御馬 一疋 「(八オ)：(八ウにも同趣の目録あり)」

雄劔 一振

龍蹄 一疋 「(九オ)」

また、同、九オ、「±進物しんぶつ并箱着目録はきばかまもろく」として、

進上

一白鳥はくてう 一番ひつがひ

一鷹たか 一

一鯛たい 二喉くちう

一鱈たら 一折せり

一海月うみづき 三桶せき

已上

月日 名

誰様 「(九ウ)」

とみえ、「千鯛ちんたい 三百入さんひやくいり」千鯛ちんたい 三百牧さんひやくまき「索麵さくめん 五十把ごじゅうば」ともみえ
 る(九ウ)。助数詞は、その対象(物・事)によって使い分けられるが、

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

さらには、場面によっても使い分けられる。

なお、「枚」字が「牧」の字体となっているのは、当時の俗用であつたらしい。

○ 牧ま〈俗字音ばく也むまきと読也〉馬を飼かひをくまき也 枚まい
 かず 正字 紙何枚なんまいなど

(新撰用文章明鑑国立国会図書館蔵本、巻下、一五七頁五行)
 既に、今昔物語集にも「瓦一牧いっまい不破ふズ、」(日本古典文学大系、三、一五七頁二行)とみえるが、西鶴の日本永代蔵にほんえいだいざう、童訓集の諸版本(原刻本、覆刻本)などにも同様の字体が用いられている。

(注1) 拙稿「西鶴作品における助数詞について」、『島大國文』、第二十一号
 平成五年三月、一一頁。

(注2) 酒井憲二「静嘉堂文庫蔵『童訓集』の本文性」、『国語史学の為に』、
 昭和六十一年五月、五五四頁。

(二) 文林節用筆海往来

享保四年(一七一九)成立、初版刊行。一冊。著者山本序周。往来物
 の一種で、「文林節用筆海大全」「文林節用筆海大成」「文林節用筆海綱
 目」「萬宝字林文法綱鑑」「萬宝字林文法宝鑑」などの別名がある。

内容につき、内題の下に割書きで「書札法式／替文章盡」とみえる。
 また後に記す、(三)享保十八年版(4)国立国会図書館蔵本、(6)刈谷図書館
 蔵本、(7)無窮会平沼文庫蔵本、(9)東京学芸大学図書館望月文庫蔵本)の

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

巻末には「豫頭目録 宝文堂版」(大野木蔵板、計七十六点の蔵版書目を掲げる)が収められているが、この内の一点に(本に改行)、

文林節用筆海往来 一冊 書札要用の文字を入／かはり文章千通余とみえる。この豫頭目録は、(一)享保四年版、(二)享保六年版には収めない。

(四)延享四年版 (13)東京大学文学部国語研究室蔵本、(五)宝暦十一年版 (14)国立国会図書館亀田文庫蔵本、(15)三次市立図書館蔵本) になるとこの目録は改訂されて「宝文堂蔵板豫頭目録」(大野木市兵衛、一二三三点の書目を掲げる)となり、この内の一点として次のようにみえる(句点)。

世に書札用文章の書数多板行あれとも万事に便利ならず。今文章千余通／を撰ひ文言の下に二行に分ちて替文章をくわへ(16)(17)の字を附て尊／

山本序周先生著
文林節用筆海往来
全一冊
卑の文法を知らしむ。其外頭書に書札要用の字
尽を節用にく／はへて／書札の伝授等かず／出し重宝の品もらさずのせ紙員をいとわず大冊とす。

同目録(同広告)は、同版の(18)東京都立中央図書館蔵本にはない。また、(六)天明七年版以下については未だ十分な調査をしていない。

『国書総目録』『古典籍総合目録』によれば、本書の版本として左記がある(*印は、今、私に附加したもの)。

- | | |
|-------------------|--------------------------------------------|
| (一) 享保四年(一七一九)版 | (三) 享保一八年(一七三三)版 |
| (1) 上田市立図書館花月文庫蔵本 | (4) 国立国会図書館蔵本 |
| (二) 享保六年(一七二二)版 | (5) 東京教育大学蔵本 |
| (2) 東北大学図書館狩野文庫蔵本 | (6) 刈谷図書館蔵本 |
| (3) 玉川大学図書館蔵本 | (7) 無窮会平沼文庫蔵本 |
| | (8) 石川謙氏蔵本 |
| | (9) 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本 |
| | (10) 宮城教育大学蔵本 |
| | (四) 延享四年(一七四七)版 |
| | (11) 岡山県総合文化センター蔵本(現在所在不明) |
| | (12) 玉川大学図書館蔵本 |
| | * (13) 東京大学文学部国語研究室蔵本 |
| | (五) 宝暦二年(一七六一)版 |
| | (14) 国立国会図書館亀田文庫蔵本 |
| | (15) 東京教育大学蔵本 |
| | (16) 東京大学蔵本 |
| | (17) 東北大学図書館狩野文庫蔵本 |
| | (18) 東京都立中央図書館(東京誌料)蔵本(『国書総目録』には「日比谷」とみえる) |
| | (19) 宮城教育大学蔵本 |
| | (20) 弘前図書館蔵本 |
| | * (21) 三次市立図書館蔵本 |
| | (六) 天明七年(一七八七)版 |
| | (22) 日本大学往来物関係コレクション蔵本 |
| | (23) 金沢市立図書館村松文庫蔵本 |

* (24) 東京大学文学部国語研究室蔵本

(七) 寛政二年(一七九九)版

(20) 東京教育大学蔵本

(八) その他

(26) 弘前図書館蔵本

この他、『日本書房目録 国語国文』No.51(平成四年一月)に、「九六〇一 文林節用筆海大全 須原屋 文政元年 一冊 三五、〇〇〇」、又、同目録、No.52(同五年二月)に、「九八八七 文林節用筆海大全 山本序周 文政 一冊 二五、〇〇〇」などとしてみえるものがある。

これらの内、(11)は、同センター奉仕課の回答によれば、戦災で焼失したかとされる。(15)は宝暦十一年版とあるものだが(国書総目録)、(13)・(24)とは別の本であろうか(未調査)。昨今の古書目録には、享保十八年版(『日本書房目録』同右)、延享四年版、江戸中期版(『福地書店 和本書目録』平成四年一二月号)などが散見する。需要が多く、かなり流布したようである。

右の内、調査を終えたのは、(1)・(3)・(4)・(6)・(7)・(9)・(12)・(13)・(14)・(16)・(18)・(21)・(24)の十三本である。次に略述する。

(一)享保四年版、(1)上田市立図書館花月文庫蔵本(庶民教育12)大本、原装一冊は、後補題簽に「文林節用筆海往来」とあり、刊記に次のようにある。

刊記 「享保四己亥歳孟春吉日

江府日本橋南巷丁目

書林

須原茂兵衛

浪華安堂寺町心齋橋筋

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

(破) 損) 木市兵衛

巻末に蔵版目録は収めない。巻首(ロノ六丁ウ)に「物の数書様之事」を掲げる(後掲)。

(二)享保六年版、(3)玉川大学図書館蔵本(Na5288、WA14-7)一冊は、享保四年版の重版。原表紙をとどめるが題簽はなく、表紙中央に直に、「文林節用筆海往来」とある。柱刻「萬寶字林文法綱鑑」。

刊記 「大野木市兵衛

享保六辛丑歳孟春吉日

江府日本橋南巷丁目

須原茂兵衛

書林

堂寺町心齋橋筋

大野木市兵衛

巻末に蔵版目録は収めない。裏表紙に「文政二卯孟春」「千時文政十亥年求るもの也」甲陽御城西川辺下高紗里穴水仲右衛門との墨書がある。

(三)享保十八年版、(4)国立国会図書館蔵本(サ/370.9/15)一冊は、享保四年版のかぶせ彫。原表紙(裏打補修あり、裏表紙は欠、新補のみ)に、原題簽(左肩、双郭、縦二二・〇センチ、横四・三センチ)と目録外題箋(いたみが甚しくて読めない)とを有する。題簽には次のようにある。

書札往来 文林節用筆海大成 全

扉(左右二頁分の上部に右から左への横書き大字で)と内題とには

「文林節用筆海往来」、柱刻には「萬寶字林文法綱鑑」とある。

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

刊記 「享保十八癸丑年八月吉日」

江府日本橋南彦丁目

書林

須原茂兵衛

浪華安堂寺町心齋橋筋

大野木市兵衛

刊記の裏から二分(四頁相当)の「豫頭目録 宝文堂版」があり、

この目録の最末尾に「書肆 大坂心齋橋筋 大野木蔵板」(「江」字)とある。

なお、本書の本文中には次のような用例も散見する。

2才4 生鯛二へ▲鯛一尾二尾一喉二喉など書ハ心持あり。只三と書ハ

難なし。又脇へよせてちいさく書ハ進上の方より卑下にて書と

いへ共貴人へハ其まゝ本行の通ニ書べし又返事にハかた／＼

脇に書べからず

96才3 仍 銀子五枚御酒二樽

108才9 珍魚一臺

121才8 鱸二尾

140才5 手本一軸

(6)刈谷図書館蔵本(2448/1/32ニ/15)一冊は、原表紙、原題簽、外題、扉、内題、柱刻、刊記、「大野木蔵板」の目録など、右の(4)に同じである。

(7)無窮会平沼文庫蔵本(二四五七三)一冊も(4)に同版である。題簽(原表紙、左肩、双郭)の下方は破損していて「筆」字までしかわからな

いが、角書、左右の「筆格指南」「部類字尽」は同一である。扉題、柱刻、刊記も同じ。

寸法 表紙・大本 縦二六・二センチ 横一八・四センチ

題簽匣郭 縦(不詳) 横三・一センチ

目録外題 縦一五センチ 横一二センチ

表紙 原表紙 色紺色 模様なし 朱筆書人あり 「無窮会／神

習文庫」朱印

内容・構成は次のようである。これは(4)国会図書館本も同じである。

見返し 扉題(上部、大字、横書)、目録

ロノ一オ 〃 (二頁を用いる)、序文

ロノ一ウ〜二オ 地図(撰津)(絵)

ロノ二ウ〜四オ 「本朝能書の三筆」、また、看板等の書様(絵)

ロノ四ウ〜七オ 「京江戸本海道道中記」(絵)、「書乃十體之事」、

ロノ七ウ〜九オ 諸職(十六職)の絵解き

ロノ九ウ 「和俗制作の字」「伊勢齋宮の忌詞」

ロノ十オ〜十六ウ 文章いろは分目録

ロノ十六ウ 凡例

(十七オ以下) 本文(「文林節用筆海往来 書札法式 替文章尽」)

本文は「百八十五終」(丁付)の丁までで、これに刊記(次丁オ)と

大野木の「豫頭目録」(同ウから四ページ分)とが続く。

(9)東京学芸大学図書館望月文庫蔵本(No.2454、T1A0/74/6)一冊も(4)と同版(内題、柱刻、刊記など同じ)。但し、表紙後補、外題は表紙左肩に直に「筆海往来」と記す。

(四)延享四年版は、(一)享保四年版の改訂版である。

(2)玉川大学図書館蔵本(No.5289、W1A1-7)一冊は、縦二六・八センチ、横一八・七センチの大本で、外題に「書札 文林節用筆海綱」(破

「冊」か)とある(原表紙・紺色、原題簽、左肩、双郭、「書札／大成」の角書きは飾り枠で囲む)。目録外題あり(縦一五・一センチ、横一一・八センチ)。扉題も「文林節用筆海綱目」(縦書き)とあるが、柱刻は

「萬寶字林文法綱鑑」とある。刊記は、年紀に「延享四丁卯年九月吉日」とあり、二書肆(住所・氏名はこれまでのものと同じ)があがっている。

巻末に蔵版目録は収めない。裏表紙の内側に「昔文化 用之主/寅年正月淨徳精舎住人/梅月/庚寅春改、」などと手筆がある。享保版でも宝暦版でも、扉から目次の「文章いろは分目録」(ロノ十丁オ十一丁ウ)までの間に「文字略上中下……」「物の数書様之事」「和俗制作の字」その他があるが(後掲②参照)、ここではその内容(文・絵)が異なっている。「物の数書様之事」は以下の本文中にもみえないが、代って、一〇二丁ウから一五二丁ウにかけて「文章〈用捨之/聞書抄〉」の一条があり、この中に助数詞用法についての言及がある。関係するところを抜出しておく。なお、(7)無窮会平沼文庫蔵本との校異を①②で示す。

△鯛一喉なと、脇に/ちいさく付るハ遣方より/卑下して書ことあり(中略)又魚/の数一喉と書事心/持ありあまねく通/用にハ一二と書へし(二〇五丁オ・ウ)

△鳥の数一番と書/祝言の時に用ゆ/常ハ一二と書へし(二〇五丁ウ)

△奉書一束進覧/など奉書ハ紙の名に/あらず杉原一束などいふも/同し奈良晒一疋なとも同し/一束といふ事も書中/には書へからず杉原紙十帖/晒布一疋など書へし(二〇七丁オ・ウ)

△生綱などの生の字/書べからず又鯛といふ/も目録注文等ハ各別/書中にハ只御肴/種と書べきなり(二〇九丁ウと二一〇丁ウ)
△密柑一折百など、/一折と書て数を書べ/からず若進物預手/形ならバ各別なり(二二三丁ウ)

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

△小袖ハ一重二重と書べし其外あるハ/拾一二と書へし(同)
△御鷹の鳥といふハ雉/に限る也外ハ鷹の鷹/鷹の鳧といふへし(二二八丁ウ)

△道明寺一袋あるハ/東山一折なと書へからず/道明寺引飯あるハ千/飯東山輕焼餅又ハ/氷餅なと書へし(同)

△縮老卷着式種な/と書へからず一卷二種と書へし證文手形等ハ/字形書直させしとて/卷式參の字を用ゆ/書状にハ用ざる字也(二二九丁ウ)

▲何にてもをくり物を/書にハあるハ千鯛/十昆布一折酒一樽と/精進物を中に書酒ハ/下略(二三四丁ウ)

「校異」(7)無窮会平沼文庫蔵本における情況

- ①付訓「かくこところもち」なし、②付訓「かず」なし、③付訓「とき」なし、④付訓「しんらん」なし、⑤付訓「すき」、⑥付訓「そく」なし、⑦用字「と」、⑧付訓「ひき」なし、⑨付訓「しよちう」なし、⑩用字「へ」、⑪用字「す」、⑫付訓「すきハらかミ」なし、⑬用字「と」、⑭用字「なまたい」、⑮付訓「じ」なし、⑯用字「へ」、⑰用字「す」、⑱付訓「たい」なし、⑲用字「かくへつ」、⑲付訓「たごんさかな」なし、⑲付訓「しゆ」なし、⑲用字「へ」、⑲付訓「をり」なし、⑲用字「と」、⑲付訓「かず」なし、⑲用字「へ」、⑲用字「ハ」、⑲付訓「こそで」なし、⑲用字「へ」、⑲用字「へ」、⑲付訓「こほりもち」、⑲付訓「しきやう」、⑲用字「事」、⑲付訓「なか」なし、

最後から二番目は、大字の用法について言及したものである。

こうした本書と同趣の版本として、後掲の(内)天明七年版、(外)東京大学文

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

学部国語研究室蔵本がある。本文は同様であるが、しかし、異版である。やはり、一〇二丁ウから一五二丁ウに「文章(用捨之)聞書抄」の一条がみえるが、付訓などに小異がある。一端を示す(上段は玉川大学蔵本、下段は東京大学蔵本)。

- | | | | |
|-----|------------------------------------------------|-----|--------------------------------------------|
| 第六例 | 一重 <small>ひとかたね</small> —一重 <small>ひとへ</small> | 第六例 | 拾 <small>あはせ</small> —拾 <small>あはせ</small> |
| 第十例 | 干鯛 <small>ひたひ</small> —干鯛 <small>ひたひ</small> | 第十例 | 昆布—昆布 <small>こんぶ</small> |
| 第十例 | 酒一樽—酒一樽 <small>さけ</small> | 第十例 | 精進物—精進物 <small>しやうじんもの</small> |

(13) 東京大学文学部国語研究室蔵本 (No.33A・45, D 39447) 一冊は、縦二六・四センチ、横一八・四センチの大本で、紺色の原表紙に原題簽(左肩、双郭)があり、外題に「(破) 文林節用筆海綱(破)」とある。外題の文字の「節用」の右傍あたりに小さく「部類字盡」、左傍あたりに小さく「 (筆か) 格指南」ともある。もと目録外題があったようだが、その題簽は剥落して今はない。扉題・柱刻・刊記は(12)と同じ。

巻末、本文(「百八十五終」と刊記との間に、次の蔵版目録があり(既出)、この点は右(12)と相違する。

寶文堂蔵板豫頭目録 大坂心齋橋筋安堂寺町 南江入西側本屋秋田屋 大野木市兵衛 (江字) 本書にも、「物の数書様之事」がなく、代って「文章用捨之聞書抄」がある (一〇二丁ウ—一五二丁ウ)。

(14) 宝暦十一年版は、(一)享保四年版を修訂した異版であるが、その間に大差はないようである。(四)延享四年版とは大きく相違する。

(14) 国立国会図書館亀田文庫蔵本 (813/S216/1757-2) 一冊は、縦二六・二センチ、横一八・二センチの大本であるが、首尾を欠いている。表紙は新補になり(茶色、題簽はあるが文字を記さない)、扉(扉題)を欠く。内題「文林節用筆海往来」、柱刻「萬寶字林文法綱鑑」。

刊記の丁を欠く。本文(「百八十五終」)の後に「宝文堂蔵板豫頭目録(13)と同じもの)を掲載する。これはもと五丁あったとみられるが、今は「目ノ一」から「目ノ三」までしかない。刊記は、この蔵版目録の次に位置していたと思われる。

本書につき、『亀田次郎旧蔵書目録』(昭和三十五年)に「宝暦頃刊か」と記されている。刊記を欠くので確定できないが、しばらくこの宝暦十一年版の項に置くこととする。「物の数書様之事」の一条あり。

(14) 東京大学総合図書館蔵本 (E26/138) 一冊(大本)は、原表紙に原題簽(左肩、双郭)をとどめるが、破損して「 筆海」としか読めない。題簽の右横に目録外題(箋は方形)がある。扉題「文林節用筆海往来」、柱刻「萬寶字林文法綱鑑」。

扉よりロノ十六ウ・一オ以下は(12)三次市立図書館蔵本と同じ。刊記は(13)東京都立中央図書館蔵本に同一だが、本文(最終丁に「百八十五終」)の次、刊記の前に次の一丁がある。

初学童蒙日用重宝書物目録 書林 大坂心齋橋筋安堂寺町南(八西側) 秋田屋大野木市兵衛 刊記のみえる丁は、上欄に「男女相姓之事」、下欄に刊記が位置する。右は「往来物分類集成」マイクロフィルムによる。

(14) 東京都立中央図書館蔵本(東京誌料3923-117)一冊(大本)は、原表紙・瑠璃色、後補題簽(左肩、双郭、これより下に貼られているのも後補題簽らしい)に「文林節用筆海往来」とある。内題、柱刻などは右(14)と同じ。刊記は次のとおりである。これは後の(12)と同じ。

刊記

宝暦十一年 辛巳 歳正月 彫工藤村嘉平治

江府日本橋南老丁目

書林

浪華安堂寺町心齋橋筋

大野木市兵衛

須原茂兵衛

卷末、刊記の前に「宝文堂蔵板豫頭目録」を収めない。この点が、右の(14)、後の(2)と相違する。

(2)三次市立図書館蔵本 (No.474) 一冊 (大本) は、原表紙 (紺色・無地)、原題簽 (左肩、双郭) に「書札一文林節用筆海往来 全」とある (「書札/大成」の角書きは輪、および、飾り枠で囲む)。外題の文字の「節用」の右傍に「部類字盡」、左傍に「筆格指南」とそれぞれ小書がある。目録題あり。表紙見返しに「文林節用筆海往来」との扉題があるが、享保版と異なり、縦書きとなっている。内題、柱刻は(14)と同じ。刊記は(10)と同じ。本文一二六丁 (「百八十五終」) と刊記との間に(13)・(14)と同じ「宝文堂蔵板豫頭目録」五丁 (目ノ一〜目ノ五) が位置する (既出)。

見返しから本文内題までには「ロノ一〜ロノ十六」との丁付けが行われ、次のような内容となっている。

- 見返し 扉題、本書著作のいきさつを述べる (序)、
 ロノ一オ 「文章貴點化與機杼」、(絵)
 ロノ一ウ〜二オ 撰津国惣名所図 他、(絵)
 ロノ二ウ〜三ウ 本朝能書の三筆、のれん・看板等の書様、(絵)
 ロノ四オ〜五オ 本朝能書の三跡の事、(絵)
 ロノ四ウ〜七オ 京江戸本海道道中記、(絵)
 ロノ四ウ〜六オ 文字略上中下：：
 ロノ五ウ〜六ウ 唐土の三筆、(絵)
 ロノ六ウ〜七オ 物の数書様之事 (後に翻字する)

近世の往来物・書札における助数詞について (三保)

ロノ七オ 書の十體之事

ロノ七ウ〜九オ 諸職 (十六職) の解説、(絵)

ロノ九ウ 和俗制作の字、伊勢斎宮の忌詞、

ロノ十オ〜十六ウ 文章いろは分目録 (本書の目次)、

ロノ十ウ〜 書札教訓状、(絵)

ロノ十六ウ 凡例 (本書の凡例)、

一オ 内題、本文の「い」部

宝曆十一年版は、内容上、享保版と同一とみられる。だが、見返し・扉以下を比較すると、版は異なっている。その一例として、内題のある一丁オの上欄に釣り人の絵がある。これにつき、この宝曆版は、その釣り竿を水平に持ち、釣り糸を海中に垂らしている (14)・(10)も同じ)。一方の享保版は、釣り竿を垂直に立てて持っている (3)・(4)・(7)など)。

(内)天明七年版、(4)東京大学文学部国語研究室蔵本 (No.23A・13、L90411) 一冊 (大本) は、表紙 (薄い青色) も題簽 (左肩) も後補になり、外題は手筆で「新刻文林節用筆海往来」とある。見返しは、原表紙とともに欠失したものらしい。もと、ここに扉題 (縦書きか) があつたかと思われる。巻首は、従って、「ロノ一」(ロ一丁オ) から始まるが、本書の場合、内題までのこの部分が三十七丁 (「ロノ卅七」) もある。柱刻は外題に同じ。

刊記 「天明七丁未歲三月新刻

江戸日本橋南巷丁目

書林 須原屋茂兵衛

大坂心齋橋安堂寺町

大野木市兵衛

刊記の前にも後にも、蔵版目録は、現在のところ、ない。しかし、そ

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

のいずれかに位置していたかとみられる蔵版目録を切断し、裏表紙の補修、裏打に用いているようである。糊付けされていて十分なことがわかないが、中に柱の上段部分の一部がみえており、その右側に「四書片仮名附^{三冊}」、左側に「和漢三才図会 八十一冊」との文字が窺える。こうした目録は、既掲の(7)・(13)・(14)・(21)の「宝文堂蔵板豫頭目録」以外のもので、今のところ、はっきりしたことはわからない。

本書の内容は、(四)延享四年版と同趣で、(一)・(二)・(三)の享保版、(五)の宝暦版と異なる。本文中に「文章^{ぶんしやう}〈用捨之聞書抄〉」(一〇二丁ウ〜一五二丁ウ)の一条がみえるのも延享四年版の(12)玉川大学図書館蔵本や(13)東京大学文学部国語研究室蔵本と同様であるが(但し、付訓等に小異あり)、所詮は異版であって延享版と異なる部分もある。その一が「ロノ廿二(廿六)に「進物^{しんぶつ}并祝言^{しうげん}結納^{けいねい}」目録^{めいよ}調様の^{てうりやう}図^ず」(ロノ廿二丁ウ)を収める点である。助数詞はここにもみえるので次に抜き出しておく(一)印は目録の輪郭を示し、/印は改行を示す。

ロノ廿三丁オ

〔進上〕 / 靄 壹羽 / 鯛 壹折 / 海月 三桶 / 以上 / 何某

〔白鳥 壹羽 / 雁 壹羽 / 生鯛 壹懸 / 杉原紙 拾束 / 御樽 壹荷〕

ロノ廿四丁オ

〔目録 / 金 拾枚 / 白綾 五卷 / 緋縮緬 五卷 / 綿 拾五把 / 熨斗 五把 / 昆布 三拾本 / 鯉節 五拾 / 鯛 壹掛 / 御樽 壹荷 / 以上 / 相生友之進〕

〔日加能子 二卷 / かうは以 三疋 / 富士和多 十把 / するめ 三連 / こん婦 十本 / 多以 一折 / 家内喜多留 一荷〕

(22) 日本大学蔵本は未見だが、刊記に大野木市兵衛の名がみえている。

さて、助数詞研究上、本書が注目されるのは、次のような箇所助数詞についての言及があるからである(付訓略)。

イ 享保版、宝暦版の「物の数書様之事」(ロノ六丁ウ)

ロ 延享四年版、天明七年版の「文章用捨之聞書抄」(一五二丁ウ)

ハ 天明七年版の「進物并祝言結納目録調様の図」(ロノ二四丁ウ) この内、ロ、ハについては右に翻字したので、次にはイについて翻字する。但し、諸本いずれにおいても印刷不鮮明や手摩れ・損傷等の箇所があつて扱ふべきところを知らない。左記の諸本を併せみることにした。

享保版 (1) 上田市立図書館花月文庫蔵本、(4) 国立国会図書館蔵本、

(6) 刈谷図書館蔵本、(7) 無窮会平沼文庫蔵本、(9) 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本、

宝暦版 (14) 国立国会図書館亀田文庫蔵本、(18) 東京都立中央図書館蔵

本、(21) 三次市立図書館蔵本、

翻字凡例

○ 付訓や濁点の施し方に不審があつても諸本に確認できない場合はそのままとする。

○ 丁数・行数の示し方、割書き・小書きの条、改行の条などについての扱いは書札調法記の場合に同じである。

〔翻字文〕

1. 物の数書様之事(この一行分は四隅に『印・印を付す])

- 2 黄金一枚とハ〈金十両なり目ハ四十七匁已下也〉
- 3 銀一枚ハ銀十両 長持一枚二つの事也
- 4 屏風一雙二まいなり 鞆ハ一丸とも一懸とも
- 5 臺子一飾風呂盆 水指 水こぼし 柄杓立 蓋置 以上六有
- 6 靄。白鳥。鳶。鳧。二羽二羽といふ
- 7 雉。山鳥。二つを一番といふ 一つをやはり一つと云
- 8 兔ハ二つを二耳といふ 一つを片耳といふ
- 9 鹿ハ二頭二頭 鞍ハ二口二口といふ しバリたるを一皆
- 10 といふ
- 11 轡ハ二口二口 鏡ハ二足とも一懸とも 切付ハ二具
- 馬衣ハ一枚 鞞ハかつてばかりは片々といふ 又は一指とも
- 金百疋ハ二歩 鳥目百疋ハ一貫ノ刃
- 鯛。鮒。鯛類ハ二つ二つツの字書べからず
- 鯉ハ二尺二尺 折ハ二合二合 的矢ハ二手一手ハ
- 二筋也
- 征矢ハ二筋二筋 弦二張ハ七筋なり一桶甘筋也
- 鷹ハ二居二居 葉ハ二包ハ一貼二貼 同ハひと合せハ
- 一剂一剂
- 筆ハ二管二管 笛ハ同 墨。蠟燭ハ二挺二挺
- 香ハ二炷 長刀ハ二柄 掛物ハ二軸
- 絵ハ二幅 案ハ二脚 駕ハ二掉
- 花ハ二瓶 袴ハ二對 扇ハ二柄
- 茶ハ二服 書ハ二冊 經ハ二卷

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

11 紙ハ二帖一束 鋸。鑿ハ二丁 蚊帳ハ一帳
 (注) 6ウ10「二具」の字は右肩に「ミ」(濁点)あり。
 (注1) 成稿後、次の版本の存在を知った。

(イ) 甲子舎栗田幸助氏蔵本、題簽・表紙・奥付は欠とされるが、版心に「萬宝字林文法綱鑑」と丁数がある。享保版のいずれかのものらしい。

(ロ) 小泉吉永氏蔵本、享保十八年版、

(ハ) 小泉吉永氏蔵本、天明七年版、

(ニ) 若杉哲男氏蔵本、享保六年版、享保十八年版(二本)、延享四年版(二本)、宝曆十一年版、文政元年版、

(ホ) 謙堂文庫蔵本、享保六年版、享保十八年版(二本)、延享四年版

(二) 二本、宝曆十一年版、天明七年版(二本)、

(イ) 酒井憲二氏蔵本、延享四年版、

(ロ) 宇野義方氏蔵本、安永八年版、

右の内、(ニ)〜(イ)は、若杉哲男「文林節用筆海往来をめぐって」(『国語史学の為』第一部往来物、一九八六年五月)による。

(三) 萬物用文章

『国書総目録』・『古典籍総合目録』に、分類は往来物、成立は安永年間(安永元年ハ一七七二一十年ハ一七八一)とみえ、東京学芸大学望月文庫蔵本(N2451, T1A0/74/3)一冊がそれであると思われる。

右蔵本には、外題も原表紙もない。新補表紙(仮表紙か)に文字はない。見返しの中央部に扉題として「童蒙一萬物用文章」とあり、この

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

角書に「尊円流」(横書)とある。柱刻に「用上」(一七丁の柱に「用上終」)、「用下」(一八丁)とある。寸法は大本で縦二六・五センチ、横一八・三センチ、本文匡郭は四周单郭、但し、中央部に枠なし。魚尾なし、本文は一ページ相当に四行、用字は漢字に平仮名付訓、画あり、彩なし、紙数、見返し半丁、序一丁、本文二六丁、刊記半丁、刊記「東都浅草御堂前」書林 辻村五兵衛板(下六字は) 本書が注目されるのは、一八丁オ(丁付は「用下」の一丁オ)から二〇丁ウまでの上欄に、「對名字」(下二字の傍訓虫損)として助数詞等の用法を掲げている点である。次に翻字する(絵解の添えられていることがあるが省略する。「印は柝の閉じ目、割書きや小字、改行などの扱いについては前項にならう)。

〔翻字文〕

18オ「冠（注）一〇といふ」

烏帽（注）子一頭といふ

直垂（注）狩衣 一具と云

袴類（注）上下一具一襲トモ(トモ) 呉服小袖二ツを一重と云

18ウ「衣物うらおもてそなハリたるを一襲と云又わた入のきぬあ

わせかたびらに通して一領といふ

帯手（注）拭一筋といふ

綿一把実綿何斤何百目

金欄沙綾綾錦段子天カ鵝絨 綸子

19オ「縞紗（注）此類一巻と云

羅紗 猩々皮 羅背 一間といふ

絹 紬 曝 木綿 此類何疋何端といふ

冑一頭敵にハ一刃といふ

鎧 一領

刀 脇指 一腰

鉞 長刀 一振

19ウ「鎗一筋一本 弓二張

鐵炮一挺一口

鞍二口二背 鎧二足一掛

障泥(語序) 二掛一指

鞆一足

鼓二丁 太鼓二掛

硯 琵琶 鏡二面

笛二管 折二合

鷹二聯 一連一居 何レも一もと

鳥(鳥か) 二羽 一翼

20オ「魚二喉 一尾 一丙

鱒一本と書

鯛一本と書

熨斗炮へのしとばかりハ不書

庖丁刀 庖丁とばかり不書

呉服 是ハ天子公方ニ不書

御服 常に可書

20ウ「鷹の鳥とハ雉也 其外ハ鷹狩川獺 鷹の鳥とハ雉也 其外ハ鷹の鳥 鷹の鳥などいふ

(注1) 本文字は「飾」か、偏は「食」だが旁は不分明。付訓は「かつら」

か、あるいは、「かさり」か。

(注2) 「頭」か、版面が薄くて不詳。

右の他、「鐘之銘書様」などの条に、「一晷鐘一口」(22ウ)、「石灯台一基」・「奉掲絵馬一篇」(23オ)のような用例もみえている。

四 永代重宝記

『国書総目録』によれば、六卷六冊、分類は事典、成立は元禄八年(二六九五)、版本は、国会図書館(六卷一冊)、東京大学、東京都立中央図書館加賀文庫(巻六のみ一冊)にそれぞれ所蔵される、とある(『古典籍総合目録』には記載なし)。

管見したところは左記である。

(1) 東京大学文学部国語研究室蔵本 (86/18/166714~66719) 六卷一冊

外題 「永代重宝記」(後補題簽、左肩、双郭、手書)

内題 「永代重宝記巻第一(一六〇)」(序首・目録首)魚尾なし

柱刻 「永代記一(一六〇)」 本文 漢字交り平仮名文 画あり

寸法 表紙・半紙本 縦二一・四センチ 横一六・三センチ

題簽匡郭 縦一五・三センチ 横二・七センチ

本文匡郭・四周単郭 縦一九・二センチ 横一三・六センチ

表紙 原表紙 色瑠璃色・模様なし

序末 「元禄八年乙亥孟春吉辰

洛下 隠士 一敬子謹書」

刊記 「元禄八乙亥年正月吉日

書林

村田七兵衛開

松屋加兵衛板

(2) 国立国会図書館蔵本 (1/211/15) 六卷一冊

右の(1)と同版らしい。薄茶色の表紙に原題簽の一部が残存している(左肩、双郭)。

(3) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本 (三五七四) 一冊(巻六)

全六巻の内の巻六だけの零本である。計二〇丁。原表紙に原題簽を有するから、これはもと六冊仕立てのものであったらしい。

外題 「永代重宝記生業附録 当世料理 肴の品々 六」(原題簽、左肩、双郭)

内題 「永代重宝記巻第六」

柱刻 「永代記六」

表紙の色、刊記は(1)東京大学蔵本に同じである。

ところで、『古典籍総合目録』によれば次のような類似書名がみえる。

永代調法記宝庫 六卷一冊 分類Ⅱ事典、成立Ⅱ元禄八年(二六九

五)、版本Ⅱ東京国立博物館、東京都立中央図書館加賀文庫、

* 永代重宝記に首巻として新撰塵劫記を加えたもの

永代重宝記宝蔵 七卷一冊 角書「増補」、分類Ⅱ事典、成立Ⅱ宝

曆一〇年(二七六〇)刊、版本Ⅱ東北大学附属図書館狩野文庫

この内、後者については未調査であるが、前者には、次のような刊本がある。

(4) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵 (二九八二) 六卷一冊

外題 「万家えいたいでほふきたからどろ 日用永代調法記宝庫 全」(角書四字は丸で囲む)(原題

簽、左肩、双郭)

内題 「増補永代重宝記巻第一目録」(目録題) 魚尾なし

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

柱刻 「永代記目」(「目」「二〇六」、他) 画 あり

寸法 表紙・大本 縦二六・一センチ 横一八・四センチ

題簽匡郭 縦一八・九五センチ 横三・六センチ

本文匡郭・四周単郭 縦一九・〇センチ 横一三・二センチ

表紙 原表紙 色瑠璃色・亀甲に花・雲などの型押模様 目録外

題あり

紙数 扉絵 左右二ページ相当で一丁分、目録 三・五丁、首部

(本文前置) 一七丁、巻一 二四丁、巻二 二〇丁、巻三

二〇丁、巻四 二二丁、巻五 一四丁、巻六 二〇丁

計一四一・五丁

刊記 「元禄八乙亥年正月吉日

浪華書林 加賀屋善藏梓

巻一以下は前掲の永代重宝記と同じらしいが、首部の一七丁は増補に

なるものである。ここには、「万家永代調法記巻之首」の題言のもとに、

「新撰塵劫記福寿海」や「算法要字」などの項目がみえており、この

内に、後掲の「数量門」がある。刊記の書林の条は後の刻にかかるとこ

の増補の時期は明瞭でない。

次は、天明七年(一七八七)刊になる。

(5)天理図書館蔵本(2084.031/251)六巻一冊

外題 「永代重宝記」(後補題簽、左肩、郭なし、手書)

内題 「増補永代重宝記第一目録」(目録題) 魚尾 なし

柱刻 「永代記」 本文 漢字交り平仮名文 画 あり

寸法 表紙・半紙本 縦二二・五センチ 横一六・〇センチ

題簽匡郭 縦一六・九センチ 横三・五センチ

本文匡郭・四周単郭 縦一八・九センチ 横一三・七センチ

表紙 原表紙 色紺・蔓草様又菱模様の型押模様 目録外題あり。

外寸 縦一〇・〇センチ 横一〇・〇センチ

紙数 首部(本文前置) 一八丁、巻一 二四丁、巻二 二〇丁、

巻三 二〇丁、巻四 二二丁、巻五 一四丁、巻六 二〇丁、

計一三八丁

刊記 「元禄八乙亥年正月吉日

増補

天明七丁未年正月良辰 誉田屋伊右々門

山口屋

河内屋八兵衛

首部一八丁の初には「新撰塵劫福寿海」との名称が付されているが、この内の一部として左記がある(△▽)は割書・右寄小字、△は改行)。

〔翻字文〕

17ウ1 数量門

2 一級 一階 一階 一番 一羽 一鳥

3 一喉 一魚又 一ツ 二幅 一献 一肴

4 一蓋 一笠 一声 一鼓 一唱 一声

5 一貫 一銭 一服 一茶 一足 一鞠 一鎧

6 一糸 一紙 一行 一状 一通 一同

7 一瓶 一酒 一段 一田 一艘 一舟

8 一端 一布 一冊 一書 一卷 一経

9 一脚 一机 一對 一筆 一管 一筆

18オ1 一張 一弓 一挺 一墨 一丁 一鋤 一鍬

- 2 一本ほん木キ 一騎き馬バ上シヤウ
- 3 一疋ひき馬バ絹キヌ 一粒りゅう葉エフ
- 4 一炷しゅう香カウ 一腰えう太タ刀チ
- 5 一種しゆん肴ヤウ數スウ 一杯はい盃ヒ同トウ
- 6 一巡しゆん連レン哥カ 一帖てう紙カミ
- 7 一劑さい藥ヤク 一雙しやう屏ヒン風フ
- 8 一斛こく五ゴ穀コク 一置てう席セキ置キ
- 9 一把へい木キ 一篇ぺん書ショ
- 18ウ 一句いっく歌カ 一膳ぜん箸シヤウ
- 1 一面めん鏡キヤウ 一捻ねん香カウ
- 2 一枚まい金キン銀ギン 一枚まい長持チヤウヂ二ニッツ云云
- 3 一丸いっがん鞠キウ一懸いっけん共キョウ 一口いっく鞍アン輿ウ
- 4 一具いっぐ切キ付ツ 一指いっし躡ニョウ
- 5 一筋いっしん的矢テツヤ二筋ニシんヲ一一手テト云云 一折おち葉エフ子シ
- 6 一柄へい長チヤウ刀トウ 一軸ちく掛ケ物モノ 一居い鷹トウ一包いっパク藥ヤク
- 7 一柄へい長チヤウ刀トウ 一軸ちく掛ケ物モノ 一掉てう駕リキヤ
- 8 一對いったい袴ハカマ 一服いっふく茶チヤ 一張いっしやう蚊カ帳ヤ
- 9 一張いっしやう弦シヤウ七筋シチシん也ヤ 一桶おけ弦シヤウ廿筋ニヤウシん也ヤ

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

ここには「幅」も入れてよからう。これは、今、「一幅」としてみえるものだが、文林節用筆海往来も永代節用無尽蔵も「幅」の字体でみえる。草書体の車偏と巾偏とが類似している点を斟酌すべきであろう。

次に、その前者と関わりの深いものをあげれば、次のとおりである。

懸けん具ぐ對たい指し尺シヤク筋シん軸シヤク手テ枚マ丸マ耳ミミ桶バケツつつ(長持チヤウヂ、魚イサ、カ)

「指」の対象は蹠であるが、前者はこれを「躡」、後者はこれを「ゆがけ」と表記しているので、これも右に含めた。

一方、その後者と関わりの深いのは次のものである。

腰ウ階カ蓋カ騎キ級キヤウ脚キヤク喉コウ献ケン炷シユ種シユン巡シユン居イ膳ゼン艘ソウ束ソク

駄ダ丁テイ挺テイ張チヤウ對たい通トウ疊テイ捻ネン羽ウ杯ハイ疋ヒツ服フク俵ヒヤウ面メン粒リツ

輻リョク

右に準ずるかとみられるものは次である。

句ク把ハ張チヤウ部ブ篇ペン本ホン折セツ

この他、「足」は、前者(対象「鎧」)と後者(対象「鞠」)とを併せ用いたものらしい。「番」・「包」は、いずれによるものかわからない。

「行」は、いずれにもみえない。

なお、「炷」・「居」は後者にしかみえないが、「炷」はいずれにも、「居」は前者にもみえる。また、「張」は、後者と一致し、前者と一致しないが、その一致しない部分の文言は「張」の条に移っているようである。

(五) 御家書札大成

成立、初版は弘化二年(一八四五)か、同年の川竜軒松明谷(松陽山)の染筆跋文がある。往来物、一冊。御家流の年始状以下の書札札である。

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

『国書総目録』・『古典籍総目録』には左記蔵本があがっている。

版本

- (1) 東北大学図書館狩野文庫蔵本
- (2) 長野県立長野図書館蔵本
- (3) 東京都立中央図書館(東京誌料) 蔵本(右目録類には「日比谷東京」とみえる)
- (4) 岡崎市立図書館蔵本
- (5) 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本(二冊、弘化二年版)
- (6) 玉川大学蔵本(二冊)
- (7) 豊科町立図書館藤森桂谷文庫蔵本(二冊)
- (8) 島根大学教育学部国語学研究室蔵本(一冊)

右の内、若干について述べる。

- (3) 東京都立中央図書館蔵本(東京誌料 3923-96) 一冊は、縦二五・七センチ、横一七・六センチの大本、原表紙(薄紺)の左肩に後の題簽(単郭)があつて外題に「御家書札大成」とある。扉題これに同じ(半丁)。頭書・本文の目録四丁、本文一〇〇丁、蔵版目録一丁半。柱刻、魚尾、本文匡郭なし。本文漢字、平仮名付訓、一ページ(半丁)五行、一行八字位。

巻末、蔵版目録の末尾に次のようにある。

「芝神明前(この四字小字)

東都書林 泉栄堂 和泉屋吉兵衛」

- (5) 東京学芸大学望月文庫蔵本(N62494, T1A0/74/46) 一冊、大本(縦二六・一センチ、横一八・〇センチ)は、原表紙(薄紺)、原題簽(左肩、郭なし)に「御家書札大成」とある。以下、蔵版目録末尾の

文言等、右(3)に同一。

- (8) 島根大学教育学部国語研究室蔵本(3759/SE56) 一冊、大本(縦二五・九センチ、横一七・六センチ)は、原表紙(薄紺)、原題簽(左肩、郭なし)に「御家書札大成」とある。以下、蔵版目録末尾の文言等、右(3)に同一。

扉題の右 「川龍軒先生書」 同左「東都書林 泉栄堂梓」

奥の跋文 「依難再応所望黙止令染毫筆/川竜軒/松明谷/(印)/弘化巳(二年一八四五)孟春仲浣(九一丁ウ)

巻末 「尊円親王御真筆発行書目」(一〇一丁オ相当部)

「青蓮院宮御直門芝泉堂先生発行書目」(一〇一丁ウ・一〇二丁オ、末尾に「東都書林……和泉屋吉兵衛」)

助数詞研究上、本書に注目されるのは、五四丁オ三行目から五八丁ウ一二行目の上欄に、「〇都て物の員をしるすに心得の事」という一条があることである(郭あり)。この全文については後に翻字する。

この一条は、また、先の(一)書札調法記の影響を受けている点でも注意される。対象となる品々、また、その数量の記し方を比較すれば一目瞭然といつてよからう。しかし、全同というわけではない。次に両者を比較し、目につく差異を列挙してみよう。

。上段に書札調法記、下段に御家諸札大成を記す。

。「鑊一鎗」「郡内嶋一郡内縞」「鼓一鼓」「鴈一雁」、また、「鶴鷄一鶴鷄」、その他、清濁や仮名遣いなどの差異は省略する。

イ、助数詞(および、単位)の用字の相違(変更)

懸(泥障など)

飾(冠)

一掛

一鎗

から (太鼓)
 反 (羽二重など)
 一柄 (太鼓)
 一端

ロ、助数詞のよみ方の相違

対 (装束)
 曲 (曲物にいれたるを)
 居 (鷹)
 一対
 一曲
 一居

ハ、助数詞の増加

ナシ
 一皿 (皿にいれたるを)
 一尺 (鯉)
 一坪 (鮎)
 一筥 (筥にいれたるを)
 一鉢 (鉢にいれたるを)
 ナシ
 ナシ
 ナシ
 ナシ

ニ、助数詞の減少

指 (指鯖)
 艘 (舟)
 服 (薬)
 一ナシ
 一ナシ
 一ナシ
 一ナシ

ホ、対象語 (物品) の相違 (変更)

牙 一猪一疋
 筭 一鷹の鶉
 反・端 羽二重……奥嶋……布子
 通 請状
 疋 羽二重……奥嶋……布子
 儉 儉 一鹿、猪
 一太織、麻
 一太織、麻

ヘ、対象語の減少

近世の往来物・書札礼における助数詞について (三保)

荷 葛籠、樽
 一葛籠アリ、樽ナシ

重 呉服、小袖
 一呉服アリ、小袖ナシ

具 目貫、太鼓
 一目貫アリ、太鼓ナシ

番 鷹……黄鷄
 一雁……アリ、黄鷄ナシ

羽 鶉……魚狗……鳩……子規……鶉……
 一鶉……アリ、魚狗・鳩・子規・鶉ノ五語ナシ
 一四語ナシ

疋 鞍、鎧、轡、切付
 一長刀アリ、劔ナシ

振 劔、長刀
 一劔……アリ、鱧・青前魚ナシ

本 鱧、鱧……青前魚
 一鱧……アリ、文鯿魚・干鱧ナシ

枚 文鯿魚……干鱧
 一鯿……アリ、文鯿魚・干鱧ナシ

面 琵琶 (善カ)、硯、碁盤、将碁盤、双六盤
 一鎧アリ、具足ナシ

領 鎧、具足
 一数珠、鯛アリ、串貝ナシ

連 数珠、鯛、串貝
 一被衣……汗衫、高宮嶋……幘

つ 袷……細美……道服……
 一袷等アリ、道服以下五語ナシ

枕、香炉
 一香炉アリ、枕ナシ

鯉……鰈……鮎……鱒……鰻……鯉……
 一鯉等アリ、鰈以下九語ナシ

管 笛
 一笛、笙、篳篥

腰 太刀、刀、脇指
 一太刀、刀、脇指、劔

壺 薰物
 一薰物、壺にいれたるを

張 蚊帳また蚊帳
 一蚊帳、弓

ト、対象語の増加

蚊帳また蚊帳

弓

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

疋ひき 一鹿、猪
枚まい 文鯨魚とびうを……
一鯉、鯉かひい

チ、対象語の表記(用字)の相違

羽はね 鵝がも……山柄やまがら……庭鴨にわがも……鵝がも……山雀やまぐさ……家鴨けがも
刎はね 胄かぶと
本ほん 鱒ます……鱒ます……鱒ます……(駁力)

この他、「鷹之鳥」へ雉子にかきる事ハ(詞力)外ハ鷹之鳥鴨といふ也
√(調法記)に対して、「鷹の鳥といへバ雉」にかぎりたる事也/そのほかハ鷹の鶴/鷹の雁と鳥の名をいふ(書札大成)といった類似、相違の類もあるが、細部については省く。

右においては、劔の助数詞が「振」から「腰」に変わったたり、弓の助数詞に「張」の他に「張」が加えられたり、また、助数詞「荷」の対象から樽が、「領」の対象から具足が消えたりなどしている。こうした異同が如何なる事情によるものかについては今後の分析を俟ちたい。

本書には、また、八一丁ウから九〇丁ウの上欄に、「〇目録のしたゝめかた/箱の書付その外/しな〜心得の事」という一条もあり、ここにみえる用例も看過しがたい。左記がそれである。

- 81ウ「千鯛」一箱
- 御樽 一荷
- 82オ「千鯛」一折
- 82ウ「一鷹」一
- 一鴨 一番
- 83オ「一鯉」一喉
- 一鯛 二尾

- 一蛤 一籠
- 84ウ「素麩」百抱(把力)
- 87ウ「石華表一基」(*鳥居)
- 87ウ「石嗽盤一基」(*手水鉢)
- 88オ「石水盤一基」(*手水鉢)
- 88ウ「薰金花瓶両口
- 88ウ「銅花瓶一對

- 88ウ「常香盤一具
- 89オ「銅鑿一口
- 89ウ「金鼓一口」(*罽口)
- 次に、先の「〇都て物の員をしるすに心得の事」を翻字する。翻字の方法は書札調法記の場合に同じである。
- 90ウ「大乘妙典八卷之内
- 90ウ「大般若経全部六百卷
- 90ウ「経一帙」(「ママ」)

【翻字文】

- 54オ3 〇都て物の員をしるすに心得の事
- 4 冠かんざり 一筋ひとかざり
- 5 烏帽子えぼし 一頭かしら
- 6 装束しょうぞく 一領くんだり 又一對/とも
- 7 直衣ひたれ 狩衣かりぎぬ 一具
- 8 立付たちつけ 肩衣かたぎぬ 袴はかま
- 9 上下かみしも 一領/とも一具/ともいふ
- 10 具服こぶく 一重かさね
- 11 袷あはせ 単物ひとへもの 帷子かたぎぬ
- 12 羽織はおり 兩合羽あまがつぱ
- 13 布子ぬのこ 夜着よまぎ 蒲団ふとん
- 14 右之類みぎのいハみな一ツと
- 15 蚊帳かや 一張はり
- 16 帯おび 一筋すじ
- 1 頭巾づきん 綿帽子わたぼうし 一頭かしら
- 2 革袴かひはかま 一襲くたり

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
煉丸粉薬香香薰香伽団扇請目手書掛机墨筆太太筆筆笙笛琴	薬薬薬薬盆盆炉物物物物羅扇扇取取録録形形状状物物物物機機墨墨筆筆太太太太筆筆筆筆笙笙笛笛琴	一	一	一	一	一	一	一	一	一	同	同	同	一	一	一	一	一	一	同	同	一	一
剂	粒	包	貼	枚	ツ	壺	炷	斤	柄	本	同	同	同	通	幅	脚	挺	對	柄	同	同	管	丁

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

4	3	2	1	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	16	15	14	13
雁大鷹鷹一七多鷹を鷹のそのにか鷹の又書長重葛数数行銚盃車屏	鴨鷹鷹一居七ツより少一竿といふ多きを一竿といふ鷹の鶉七ツよりをいふ鷹の雁と鳥の名そのほかハ鷹の鶴にかぎりたる事也鷹の鳥といへバ雉	白	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鳥	本	居	串	な	い	より	名	鶴	事	雉	部	掉	組	荷	連	部	對	枝	面	輛	雙	風	

- 5 雞にハトリ 雉子きじ 山雉やまどり
- 6 右のるいを一番といふ
- 7 一説に鳥一番といふ
- 8 ことハ祝言の時に限て
- 9 用ふ常にハ一羽二羽
- 10 といふ
- 11 鶺鴒うぎす 鶺鴒うぎす 雀すずめ
- 12 雲雀うばり 鶺鴒うぎす
- 13 時鳥ときどり 鶺鴒うぎす
- 14 山雀やまがら 四十雀しじゅうから
- 15 鶺鴒うぎす 菱喰ひしくひ
- 16 家鴨あひる 鶺鴒うぎす 鶺鴒うぎす
- 17 鶺鴒うぎす 木兎きう
- 58才 1 右のるいハミな一羽
- 2 二羽といふ
- 3 鯛たい 一折おひ
- 4 鯉こい 鮎あゆ 鱸うなぎ
- 5 鰯いわし 鮎あゆ 鮎あゆ
- 6 鯖さば 魴魚まなかつ 杉魚くろたい
- 7 右のるいを一ツといふ
- 8 鰈かれい 鰈かます
- 9 鰈かれい (鰈)
- 10 右のるいを何枚といふ
- 11 鰈はも 鰈はも 雪魚なぐさ

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

- 12 鱒ます 鱒ます (鮫カ)
- 13 右の類を一本といふ
- 14 鮎しらす 一擗おひ
- 15 鮎しらす 一尺しやく
- 16 鮎しらす 一連れん
- 17 蛸たこ 一盃はい
- 58ウ 1 串海鼠くしら 一桁けた
- 2 鹿一足を二頭といふ
- 3 猪一足を一牙といふ
- 4 兎一ツを片耳と云
- 5 ニツを一耳といふ
- 6 都て臺に載たるを
- 7 一折といふ籠に入たるを
- 8 一筐又一籠と
- 9 いふ曲物にいれたるを
- 10 一曲といふ此外一鉢はち
- 11 一皿一筥一壺みやげミナ
- 12 おなじ

(注) 難字について—58才12「鱒□(鮫カ)」存疑。58才14「坪」存疑。白魚二十一筋(匹)、または、二十筋を一ト樽蒲という(柳亭記、他)。

(六) 大成筆海重宝記文章蔵(大成筆海重宝記)

往来物の一。『国書総目録』にはこの書名がみえないが、「大成筆海重宝記」として掲出されているのがそれであろうか。これには、一冊、分

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

類は往来物、成立は寛政九年、とあり、寛政九年(一七九七)版が東京大学、刊年不明のものが金沢市稼堂文庫(大成筆海)にそれぞれ所蔵されているとある。『古典籍総合目録』には何の所掲もない。

架蔵本は、縦一二・五センチ、横一八・九センチの横本、二つ切本一冊で、原表紙は有しているものの題簽(もと左肩、双郭)も外題もない。扉題に「大成筆海重宝記文章蔵」とあり、柱刻に「筆」、原表紙に「筆海」の型押文字がある。内容は「年頭状」以下の書状案集であるが、巻末に「吉書始めの詩歌品々」以下の附録が付いており、この目次(目八丁オ)に「大成筆海重宝記附録目」とある。丁数は、扉一丁、目録八丁、本文一七三丁、刊記半丁、一ページ七行。

本文末 「右一帖者依／所望馳愚毫／畢

寛政第九菊月／青蓮院宮直弟／永田光□／書之

刊記 「寛政九丁巳歳九月吉日

順慶町心斎橋東へ、入柏原屋

浪速書肆 渋川 與 左衛門 版

東京大学総合図書館蔵本(E26/339)一冊は、右と同版であるが、外題(原題簽、左肩、飾り郭)に「大成筆海重宝記全」とある。

扉題以下、本文も刊記も右に同じであるが、唯一点、「附録目録」(右では巻首に位置する)が、本文部と附録部との間に位置している。

助数詞に関し、本書の附録の中には次の一条がある。

〔翻字文〕

- 1 物数書法 (この一行は二四二ツ)
- 2 鶴白鳥鷹鴨 一羽 鯛鯉鮒 一
- 3 雉子 二ツならバ 一番 鯉節 十ヲ 一連

- 4 鯛串炮 壹連 樽一 二ツハ 一荷
 - 5 呉服 二ツ 一重 羽織 一本
 - 6 袴 一對 扇 一本ハ 一柄
 - 7 筆筒長持 一棹 葛籠 二ツ 一荷
 - 8 挾箱 二ツ 壹荷 屏風 二ツ 一双
 - 9 琴 一弦 三味線 一挺
 - 10 琵琶 一面 笛 一管
 - 11 乗物駕籠 一挺 立花 一瓶
 - 12 白銀壹枚 十兩也 黄金壹枚 十兩也
- 右の内、六行目の末尾の付訓は「び」とある。
また、右の直前の、「目録認めやう并樽の事」(二四二丁方)には、

- 白鳥 一羽
- 鷹 二羽
- 干鯛 一折
- 鮭 三尺
- 海月 壹桶
- 縮綿 壹卷
- りんず 壹卷
- 紅緞(絹) 壹疋
- 真綿 二把
- 鯛 二
- 昆布 三把
- 熨斗 壹把

のような用例があがっている。

(七) 大諸礼集

『国書総目録』・『古典籍総合目録』によれば、武家故実書として分類され、十七卷十七冊、著者は伝小笠原貞慶、写本に東京都立中央図書館(東京誌料)蔵本、版本に、国立国会図書館蔵本、東京大学蔵本、東北大学図書館狩野文庫蔵本、刈谷図書館蔵本、彰考館蔵本、青森県立図書館工藤文庫蔵本、岐阜市立図書館蔵本などがあるとされる(無刊記)。

東京都立中央図書館蔵本(東京誌料、〇七二二一八)は全十七冊で、新しい藍色の表紙の題簽に「大諸礼」(左、双郭)とある。書口白、本文は漢字・平仮名交り文、寸法は縦二六・四センチ、横一七・四センチ、題簽匡郭は縦一二・五センチ、横一・六五センチ、本文匡郭(四周単)は縦二〇・三五センチ、横一五・三センチ。

東京大学総合図書館青洲文庫蔵本(A00-5823)は十冊仕立てで、紺色の原表紙に「大諸礼集」との書題がある(左、直)。第四・五冊の二冊には原題簽(左、双郭)の破片をとどめる。寸法は右に大同。上欄や行間に朱・墨の書入れがある(加筆修正、校合、庵点、句読点等)。

(例、本文)： 鷹一鳥五： 鰈二懸： (書札之次第、第一七条)

朱筆で、「鳥」の左に「甲」を添え、付訓「てう」に重ねて「かも」と書き、上欄に「美物肴類也」と注す。また、「鰈」の左に「。」印を付し、上欄に「。鰈イニ」と注し、付訓「いなた」に重ねて「しりがい」と書く。

折紙目録などの場合、朱筆でその字高や行間の寸法を指定している。

近世の往来物・書札礼における助数詞について(二三保)

東京大学総合図書館南葵文庫蔵本(G28-781)は全十七冊で、紺色の原表紙、原題簽(左、双郭)に「大諸礼集」(書札「巻」)のようにある。寸法、縦二七・七センチ、横一八・九センチ、題簽匡郭縦一七・一センチ、横三・四センチ。

国立国会図書館蔵本(17/857/21)は全十七冊で、原表紙(黒、雷文様)、原題簽(左、双郭)に「大諸礼集」(書札「巻」)のようにある。旧蔵者印「伊勢朝明郡丹羽氏蔵書」(朱)、他。

大諸礼集(十七卷十七冊)については、平凡社刊東洋文庫に収録されたものがある(全二巻、島田勇雄・樋口元巳校訂、一九九三年二月・三日)。できるだけ読み易く活字化されたもので、精確な翻刻ではないが、その内容を知るには至って便利である。また、本書の解説によれば、無刊記版には美濃版のものと、やや小型の版があり、刊記を記す版に、「小笠大諸礼集」の題簽をもつ寛延二年版がある、これらはいずれも同一版木を使用しているとされる(二四七頁)。

助数詞の類は、本書の諸所にみえているが、殊に、一、二巻の「書札」の巻、三巻の「書札註」の巻(柱刻はそれぞれ「書札上」「書札中」「書札下」)に多くみえている。右の東京都立中央図書館蔵本(東京誌料)を底本として、これら三巻から用例を抄出しよう。頭部の算用数字は条文番号であり、6オとする類は丁数である。改行についての注記は省略する。

(一巻)

17 6オ 一樽たひふつ書状にかき加ふる様体之事
貴札委細致二きまついたし 拝見はいけん一候 抑雁おさひかり一 鳥五とりご 鯛十たう 御樽三荷ごたん
被二送下一候 賞翫しょうくわん 無二比類一候 併ひら 御懇志難二ごこんしがた

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

申尽つくし一候 仍比よつてひけうに與候へ共 見来候間 鯰いなだ二懸令二進入一候 旁以かた二參上一可二申込一可レ得二御意一候 恐惶謹言

月日 名乗判

某殿 参 貴報

6ウ 先日者預御使候 殊更見事之拜領於レ爾レ今畏入存候將又鴨五鶉二折 鯉一 塩引三尺 貝蛸一折「令レ進レ之候 心事以二面拜一可二申承一候 恐々謹言

月日

某殿 進覽

18 6ウ 一鳥ハ何鳥にても。別に書べし。次第ハ白鳥一 雁五 雉十 ひとつ有べし。何鳥にても数有べし。鯉五喉など書ハわろし。喉の字有べからず候。又一かけなどもよろしからず。鮭をば五尺一尺など書也 又荒巻ハ数を二十三十と書べし 折帛にいく色もあれ。樽のそはん時ハいちをく成べし 一桶に入候物。進物に書時ハ。一桶十桶などかくへし 一折紙可レ調様 次第上中下如此也 是ハ公房様へ諸家よりの認様也

進上

御太刀

御馬

万疋

以上

土屋左衛門大夫

14オ「是ハ三職への趣也 此中にも真草ハ勿論也 人により公方様へのことく相調らるゝかたも在之べし

御太刀 一腰 國光

御馬 疋河原毛

以上

左衛門大夫

49 17オ 一注文書様の事。帛一枚を折紙にして書べし 書べき次第 如レ此 注文

太刀

織物

折

山鳥

白鳥

鴈

鯛

鯉

樽

馬

百貫文

以上

信元

信元

(第44条、下略)

(二卷)

松田左衛門大夫 (第49条、下略)

20 4才 一御樽折帛調様の事

御盃合 絵やう書へし 御折十合 数不定 押物五合 数不足 御樽十荷柳ならバ柳何荷と書べし。御字は不レ可レ有之

天野ならバ御樽天野何荷と可レ有レ之 裏の書様同前

29 5才 一書札にむち ゆがけ うつほなどをかなに書て可然也

馬のハむち 鷹のはふちなり。同あつち にきり いたつき此類もかなよく候。同鷹の事かなたるへし。せうのと

5ウ たる鳥をも兄鷹の取たる鳥の「よし書べき事にて候。殊のせうの餌柄をば賞翫無二比類由に候 能々心得有べき也

32 6才 一御台へ参折紙の事

しん上

御かうはこ 一こ (東京大学青洲文庫蔵本) には「一かう」とある

御ほん 一こ (右に同じく) 「一まいし」

三千ひき

以上 名字官途受領 名乗 名乗

38 9才 一馬道具書状に可レ調之事

鞍一〇 轡一〇 鏡一掛共 切付一疋之分 力革一具 鼻革一具

手綱一筋 房一具 馬衣一枚 鞆一丸ノ類とも はつな

一間 しつつな 一筋 うつほ二つ 奉射のゆかけかたく

近世の往来物・書札礼における助数詞について (三保)

(三卷)

39 9才 一兔ハ一耳二耳 一疋二疋とハ悪し。但し一耳と「ハ二つの事也一つをハ片耳と書なり。一つ二つとハくるしからず

9ウ 「候 書べきなり

40 9ウ 一鷹犬をば一牙 かように書べき也 (東京大学青洲文庫蔵本は上欄に「獫」)

28 8ウ 一進上折帛調様の事

御太刀 一腰 銘

御馬 一疋 毛付 印有へし

万疋 以上 名字官 或ハ受領名乗

同又

御太刀 一腰 銘

「御絵 一幅 筆、

御香合 一惟、||

金欄 一端 色付

御盆 三枚 惟之 (云々カ)

以上

又 御太刀 一腰 行平

御香合 一引合

如レ此引合を香合下に付らるゝもあり。これハ引合をそゆれば。四色たる間 故実也

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

9ウ

以上

「又

御太刀

一腰 銘

御小袖

五重 練貫

御弓

二十張

鐘子

二十

引合

十帖

以上

何れも此書様にて可レ被二心得一也。これハみな 公方様
へ進上之分也。鳥目とりめの時ときはたゞ千疋万疋と斗あるべし 同事

ながら萬まんの字じハわろし。万まんの字じよしと云々

29 10オ

一御台おんたいへまいり候折紙之事

しん上

御かうはこ

一こ

御ほん

一こ

三千ひき

以上

名字なづな官くわん 又ハ受領じゆりやう名なのり

かなの時ハ。名なのり大略りやう上じやうの字じをかなに書候。又下したの字じを
も書く人もあり

二 資料B群

(一) 礼式書札集

『国書総目録』・『古典籍総合目録』では礼法書として分類され、次のような版本があげられている。

(一) 延宝三年(一六七五)版

(1) 京都大学文学部国文学研究室頼原文庫蔵本(二冊)

(2) 弘前図書館蔵本(「礼式集」、下存 一冊)

(二) 貞享五年(一六八八)版

(5) 神宮文庫蔵本(二冊)

(三) 刊年不明

(6) 宮内庁書陵部蔵本(一冊)

(7) 大橋図書館蔵本(一冊)

『近世文学資料類従 参考文献編14 重宝記集一』(近世文学書誌研究会編、野田千平解説、昭和五十四年四月、勉誠社刊)によれば、この他、延宝三年版として左記があり、

(3) 前田金五郎氏蔵本(一冊)

(4) 前田金五郎氏蔵別本(上卷一丁欠)

延宝三年版には、上方版とみられる(3)・(4)と江戸版とみられる(1)との二種があるとされる。

(1) 京都大学文学部国文学研究室頼原文庫本(W1/1)は、上・下二巻の横本二冊で、縦一三・八センチ、横二〇・五センチの二つ切本。原表紙(縹色、無地)のままだが、上巻の表紙は、その表面を覆っていた縹色の薄紙が剥落している(この点につき、右の類従の解説では「ただし上巻表紙のみ原表紙に灰色の紙を貼布。」とするが、これは明かな誤り)。後補の題簽(左肩、双郭)に「礼式書札集 上(下)」とある。序題、目録題はこれに同じ。尾題なし。匡郭なし。柱刻は「序」「目録上」

「上」、「目録」「下」、紙数は、上に二八丁（序一、目録二、本文二五の丁数）、下に二八丁（目録一、本文二七丁の丁数）の計五六丁。一ページ相当（半丁）に一五行。墨の書人がある（江戸中期）。上巻序の末、下巻奥（二八丁オ）に次のようにあるのは序跋年月日・著作年月日の類であろうか（右類従の解説では「刊記」とする）。

序・奥 「延宝三卯 弥生上旬」

次の(3)とは異版で、本文配置に差異がある。

以下の三本は右類従の解説による(3)・(4)における「刊記」との用語については解説のままとする。(5)のそれは刊記と認められる。

(3)前田金五郎氏蔵本は、上・下二巻一冊（改装）、縦一三・五センチ、横一九・二センチの横本。原表紙（砥粉色）、原題簽（下部破損、左肩、双郭）に「改新礼式書札集」、序題・尾題「礼式書札集」、目録題「書札集目録上」「礼式書札集目録下」、匡郭なし、柱刻「礼上一（廿四）」「礼下一（一九）」、計四三丁。

刊記 「延宝三卯六月吉日」

(4)前田金五郎氏蔵別本は、右(3)と同版、上巻一丁欠、表紙後補、題簽なし、裏打、修補あり、他(3)と同じ。

(5)神宮文庫蔵本は、右(3)をかぶせ彫にした本で、上・下二巻二冊、縦一三センチ、横一九・一センチ、原表紙（縹色）、原題簽（双郭）に「改新礼式書札集 上（下）」、内容は(3)に同じ。刊記左記。

刊記 「貞享五戊辰年

茨木多左衛門」

右類従には、(3)を底本とする複製が収められている。今、これにより、助数詞（および、単位）に関わる条を拾い出せば次のとおりである。

近世の往来物・書札における助数詞について（三保）

〇印は改行、「」印は目録の輪郭を示す郭を示し、*は折目の所在を示す、真行草の別省略)。また、右の(1)（京大本）における書人を「」内に示す。

上9オ「ひとと一太刀目録品々 禁裏 公方様

〔進上〕 *御太刀一腰／御馬一疋／* 以上／名字官／名乗

9ウ〔進上〕御太刀 一腰／*御弓 一張／御征矢 一腰／御鎧

一領／*御馬 一疋／以上／名字官／名乗

〔進上〕 *御刀 一腰 長光／御脇指 一腰 正宗／御産衣 二

／* 以上／名字官／名乗

〔進上〕 *綿 百把／糸 百斤／段子 百端／*金蘭 百端

／以上／名字官／名乗

〔進上〕 白鳥 二／*鴈 三／鯛 一折／鱈 一折／*海月

てん 已上／名字官／名乗

10オ〔進上〕 *御盃台 一／御樽代金子十両／* 以上／名

字官／名乗

〔進上〕 御呉服 十／内白三／以上／名字官／

名乗

〔進上〕 御帷子 五 用ハシ／内御単物 二／以上／名字官

／名乗（京大本、「子」の右傍から「五」の右肩にかけて「」を引き、その右に「用ハシ」との小字書入あり）

〔進上〕 鱒塩曳 五／名字官／名乗

10ウ〔進上〕 御折櫃物 一合／已上／名字官／名乗

右之目録 禁裏 公方様 江上ル／躰なり此内名字官／を除き

又ハ真行／草の書様にて貴人／等輩へも用る也

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

一 関白 親王 江

「 / 進上 / *御太刀 一腰 / 御馬 一疋 / * 以上

／ 名乗

此目錄少行字をまぜて宮門跡撰家門跡 江 / 用るなり又進上を / 除名乗の右下 江 よせ / 上と云字書時ハ進上 / 程之敬なりたとへは / 名乗 上 如此可書

11オ 「一敬方 江

「 / *御太刀 一腰 / 御馬 一疋 / * 以上 / 名

字官

一少敬方又等輩 江も

「 / *御太刀 一腰 / 御馬 一疋 / * 以上 / 名

字官

当時ハいにしへとちかひ / 古上輩に用るを等 / 輩に用由

11ウ 「一家来又ハ猿樂 江

「 / *太刀 一腰 / 馬 一疋 / * 以上

町人家来同前之 / 者の方へ如此候

16オ 「一神前目錄 并 佛前目錄

佛前 江 如此

「奉献上 / *御太刀 一腰 / 御馬 一疋 / * 以上 /

名字官 / 名乗 (京大本、「佛前」(一五丁ウ)は「神前」(一五丁オ)に後置する)

神前 江 如此

「奉献上 / *雄劔 一振 / 龍蹄 一疋 / * 以上 / 名

字官 / 名乗

17オ 「一女中方より男の方へ目錄

主君の奥其外様々敬方 江 如此男 / の方よりも同書様なりたし / 男ハ名字官名乗可書

「志ん上 / 御ひら / *ゆき / 御まな / やまふき

／ *御やなき / 已上 / たれ / 内

「 / 志ん上 / *たい 三 / * / もり

とさの守 / かつ重

男の方より主君 / 奥其外 / 敬方へ、如 / 此但志ん / 上を

のそ / き等輩 / へも

名乗の下ハ守に可書 / たとへは かつ重如件

「 / 志ん上 / *御香てん万ひき / *

もりいかの守 / 名乗

「 / 志ん上 / * 万ひき / * / もり

いかの守 / 名乗

19オ 「一首注文之事

豎帟なり人数次第継帟に / して可書但帟の端に如此可 / 書出

康安二年五月七日於河内国高 / 山及一戦討捕之首目錄

是迄 一丁下りニ

首 老 柳生七郎 関甚平討捕之

首 式 細川四郎 成尾丹下討捕之

太田半平

首 老 名字不知 村上九郎討捕之 / (一行略)

右首数都合千五百五拾此外付 / 於不知数 / (下略)

20オ 「一ゆかけの事 左右 / ゆかけの時ハ 御鞆一具とも

弓ハ 御右ゆかけ一指 「一右掛

又御弓ゆかけとも

『又御磔一懸とも』

鷹ハ 御左ゆかけ一指『一指掛』

又御鷹ゆかけとも可書之

箱の上書之事

(中略)

〔蠟燭 百挺〕 〔御茶 名字官〕

足なき箱にハ如此板目ニ可書之

21オ「一物之数書様 『・』一ゆかけ 一指

『・』一馬ハ むち 『・』一鷹ハ ぶち

『・』一うつほ 一保 『・』一あをり 一刺『懸』

21ウ「一鞍覆 一掛 一鞍『背』一口

一狸々緋 何間 一鏡 一足

一甲 一刎敵 一甲 味方 一頭

一押懸 一掛 一切付 一口

如此可書

24ウ「一鷹一もと二もとの字之事

一居 二聡 (聯カ) 三連 (是ハ三連より百二百連迄)

一本 □久ニ不書由

下2ウ「二香奠

上輩「 進上 / *御香奠 千疋 / *

名字官 / 名乗

下輩「 / *香奠 百疋 / * 「

中輩「 / *御香奠 拾両 / * 名字官

近世の往来物・書札礼における助数詞について (三保)

御経など認 (存疑) 時ハ／御経先に可書

主なところを引用したが、書状等の中には、「時服三具進覧之候」(上12ウ)、「時服五具進之候」(上16ウ)、「十帖一本御持参」(上15オ)などの表現もみえている。「十帖一本」とは紙一束と扇一本の謂である。

(二) 字林用文筆宝蔵

『国書総目録』には所掲がない。『古典籍総合目録』に、分類は往来物として左記一本があげられている。

安永八年(一七七九)版 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本

右蔵本一冊 (No.2471, TIAO/74/23) は、後補表紙に直に「字林用文筆宝蔵」(左肩)とあり、扉題にも「字林用文筆宝蔵」とある。書型は、縦二六・一センチ、横一七・九センチの大本、計八一丁、柱刻・魚尾なし、本文は漢字で平仮名付訓あり。

刊記 「安永八 己 亥 年正月吉旦

西エ入町

(破損) 版 (或は「衛」か)

本書には、「目録調やう」(二六丁オ)、「諸物異名」(七八丁オ)などに次のような助数詞、および、単位がみえている。

イ「●目録調やう」(二六丁オ)の中に、

●鳥をバ一二と書也二羽二羽一番二番折とハかゝざる物也しやう

じん物ハ／魚類よりさきに書也

〔進上〕 白鳥 一／雁 二／鯉 一折／鱸 一折

〔海月〕 三桶／以上 〃／氏名 〃／名乗

〔 〕 〃／三桶 〃／以上 〃／鯛 一折／鮭 一尺／海老 一

近世の往来物・書札礼における助数詞について(三保)

折／蛤 一籠／以上 樽あらバスゑに／かくべし」

「▲註文調様法式」(二六丁ウ)の中に、

●まき物類ハ一端二端とかく物也

●絹(中略)何疋とかく物也(下略)

「▲太刀折紙法式調様」(二七丁ウ)の中に、

「進上 御太刀一腰□(?) 此間三十六分／御馬一疋毛／以上(下略)」

「▲女中目録書様ノ事」(一九丁オ)の中に、

もくろくニハもくろくなしと／いへども女中ハくるしからざるにや

「しん上 白てうニ たい 一折／たら 一折

／さけ 五 〃* ふな 一折／御たる 十か 〃

●しん上と有ハ／主人貴人の／女中方へ男の／方よりしん上の／て

い大方如此也／男の方より女中方へハかなにて書／物也女のこと
バに／鯛をひら鱈を／ゆき鮒を山ぶぎ／なとゝいふ也男の／方よ
りハ書へからず

「一をり／御まな 五 〃*やまぶき一をり／御たる 十か 〃

已上 〃」

●如此しん上書／なきハ女中より／男の方へ異名／をかくもの也／

上の女中より／下(下略)』

ロ「諸物異名」(七八丁オ)として、それぞれに欄を設け、たとえば、

酒 青州 竹葉

一樽 明樽 雲泉

のようにある。今、異名を省いて列挙すれば次のとおりである。

酒	一樽	香	(助数詞例ナシ)	筆	一管 一本 一對	紙	一帖 一折 一張 一葉	銭	十文を二疋 百文を十疋	刀	一とこし 小太刀ハ一とこし	琵琶	一面 長太刀ハ一と振と云	大鼓	一掛 一管	書物	一冊 但シ御経ハ一巻と云	舟	一	碁	一局	扇	一本	墨	一挺	硯	一面	茶	一斤	机	一脚	鞆	一	鼓	一	一足	一丁
---	----	---	----------	---	----------	---	-------------	---	-------------	---	---------------	----	--------------	----	-------	----	--------------	---	---	---	----	---	----	---	----	---	----	---	----	---	----	---	---	---	---	----	----

(三) 萬代用文字宝大全

『国書総目録』には所掲がない。『古典籍総合目録』に、分類は往来物として左記版本二本があげられている。

(1) 玉川大学図書館蔵本 上下二冊

(2) 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本 一冊

(1) 玉川大学図書館蔵本 (S5410, WAI6-7) 二冊は、紺色の表紙に原題簽を有し(左肩、双郭)、外題に「人家重宝／永代必用／初学指南(以上角書、三行それぞれ有郭) 万代用文字宝大全 上(下)」とある。上下二冊とも題簽の右に方形の繪箋を貼付する。

内題「万代用文章上卷目録」(目錄題)、柱刻「用文章上(下)」。魚尾なし。寸法は、縦二五・五センチ、横一八・三センチの大本、題簽匣郭は縦一八・四センチ、横三・五センチ、本文匣郭は四周單郭で縦二一・

二センチ、横一六・一センチ。紙数、上冊は、目録半丁、本文二二丁、篇冠尽半丁、下冊は、目録半丁、本文二二丁、月の異名半丁、その末尾の丁の左下角に刊記として「小川久兵衛行板」との一行がある。絵あり。小川久兵衛は京都の板元で、享保十四年（一七二九）から明和三年（一七六五）の営業期間が知られる（坂本宗子編『享保以後板元別書籍目録』昭和五十七年四月刊）。

本書には、先の字林用文筆宝蔵東京学芸大学図書館望月文庫にみられるような「●目録調やう」の一条がある。抄出する。但し、「諸物異名」の条はない。

（上冊、上欄）（五丁オ）

●目録調やう一番鳥二番ニ川魚三番ニ海魚何時も鳥類をハ／先ニかき（下略）

●鳥をハ一二と書也二羽二羽一番折とハかゝざる物也（下略）

「進上」白鳥一雁二鯛たひ一折／鱸

一折／海月三桶以上氏名名乗

「蛤」一籠以上樽あらバスゑに／かくべし

（五丁ウ）

●まさ物類ハ一端二端とかく物也

●絹はぶたへばかり何疋とかく物也馬ニ引する古事有ゆへ疋と云也

（六丁オ）

▲折鳥目等目録書様

●折ハ一つなれバ一合。十なれバ十合と書

近世の往来物・書札礼における助数詞について（三保）

「進上」御盃台竹松御折十合御樽十荷／＊
 已上 誰何がし 名乗
 「進上」＊万疋 誰某

（六丁ウ）

▲太刀折紙法式調様

「進上」として「御太刀一腰」「御馬一疋名」

（六丁ウ）七丁ウにかけてこの類例あり

（八丁オ）

▲女中目録書様ノこと

「しん上」白てう 二 ＊ たい 一折 たら 一折

／ さけ 五 ＊ ふな 一折 御たる 十か

已上 白てう 一 ＊ 御ひら 一をり ゆき 一

をり 御まな 五 ＊ やまぶき 一をり 御たる 十か

已上 白てう 一 ＊ 御ひら 一をり ゆき 一

(2) 東京学芸大学図書館望月文庫蔵本 (No.2452, T1A0/74/4) 一冊は、後補表紙に原題簽をとどめ（左肩、双郭）、外題に「書札 萬代用文字宝大全 全」（角書四字は輪で囲む）とある。首欠。書型は、縦二六・〇センチ、横一八・七センチの大本、題簽匣郭は縦一九・九センチ、横三・五センチ、本文匣郭は四周単郭で縦二二・二センチ、横一六・四センチ。柱刻・魚尾なし。本文七七丁、一ページ相当（半丁）四行、本文は漢字で平仮名付訓あり。また、絵あり。

刊記 「京三条通寺町西エ入町

正本屋吉兵衛板」

近世の往来物・書札における助数詞について(三保)

正本屋吉兵衛は、「宝曆十三年(一七六三)より安永(一七七一)一七八一」の頃にかけて三条通寺町西入とせり(井上和雄『慶長書賈集覽』、言論社、昭和五十三年六月)とされるから、右はこの時分の刊行になろうか。

本書には、先の字林用文筆宝蔵東京学芸大学図書館望月文庫蔵本におけると同じ「●目録調やう」の一条がある。但し、「諸物異名」の条はない(七八丁オは裏表紙の裏に相当し、それを掲出することのできる丁そのものがない)。

本書にみえる助数詞類については、(1)、また、右と重複するのでここには掲げない。

(四) 弓勢為朝往来

往来物の一で、著者は十返舎一九二世(十返舎一九)、文政六年(一八二三)の成立・刊行になる。『国書総目録』には、通信博物館、東京大学、東北大学附属図書館狩野文庫、無窮会織田文庫に版本を所蔵するとある(刊行年についての説明はない)。この内、東京大学蔵本は、「マイクロフィルム版 東京大学総合図書館所蔵岡村金太郎蒐集「往来物分類集成」」のリール四三に収められている。その作者、刊年、刊行者は次の三次市立図書館蔵本と同じである。『古典籍総合目録』には、玉川大学に文政六年版(一冊)を所蔵するとある。

文政六年版は、三次市立図書館にも所蔵されている(10326)。縦二・二センチ、横一五・六センチの半紙本で、上魚尾(黒、単)、白口、本文匡郭四周単、見返し半丁、扇一丁半、本文九丁から成る。外題(原題、左肩、単郭)には、「^{甲申}新版「弓勢為朝往来完版」」とあり、刊記には、

「文政六癸未年/地本問屋 江戸馬喰町二丁目 山口屋藤兵衛板」とある。本文の始まる前の二丁オ(扉)に、「鷹通号之図」(絵図)、「鷹之用通称之文字」、以下があり、その内に次の一条がみえる。

鷹一もと二もとの文字

^{もと}居一すゑの時用ゆ

^{もと}雙二もとに用ゆ

^{もと}連縣(ママ) 此二字二もと以上より百連二百連にも用ゆ

^{すたか}巢鷹ハ一二といふべきなり

「もと」は、鷹狩りの鷹の教をかぞえる助数詞であり、この用字がその数によって「居」「雙」「連・縣(聯か)」と相違すること、また、巢鷹は「一二」とかぞえることを説いたものである。

おわりに

近世には、往来物とともに多くの書札が刊行され、そこでは助数詞についてことさら言及されることがあった。^(注1)これは、中世における故実書の流れを汲むものであり、降っては、明治・大正^(注2)、さらには今日においても同様のようである。

近世の書札における助数詞は、日本語における助数詞の研究上、貴重な資料となし得るであろう。よって、本稿では、これを収集して翻訳し、利用・検索の便宜を計ることとした。これらの用法を分類・整理し、他の資料ジャンルにおける用例と比較していけば、総合的な共時的、また、通時的考察も可能ではないかと考える次第である。

書札に助数詞が掲出される場合、その項目名(見出し)は次のとおりである。

一 資料A群

(一) 書札調法記

衣服并魚鳥詞づかひ、折紙目録書様、他

(二) 文林節用筆海往来

物の数書様之事、進物并祝言結納目録調様の図、他

(三) 萬物用文章

対名字□、他

(四) 永代重宝記

数量門

(五) 御家書札大成

都て物の員をしるすに心得の事、他

(六) 大成筆海重宝記文章蔵

物数書法、目録認めやう并樽の事

(七) 大諸礼集

樽ひふつ(美物) 書状にかき加る様体之事、注文書様の事、馬道具書状に可調之事、他

二 資料B群

(一) 礼式書札集

物之数書様、(進上目録の書き様)、他

(二) 字林用文章宝蔵

目録調やう、諸物異名、他

(三) 萬代用文字宝大全

目録調やう、他

(四) 弓勢為朝往来

鷹之用通称之文字

こうした項目名(見出し)からしても、助数詞は「書き記す」ことばと関わり深いものであることが知られよう。

助数詞のみえる書札礼は、本稿に扱った以外にも存在しているであろうが、短時日にそれらを探り当てるのは容易ではない。ここには、目下求め得たところとして掲出することとした。今後にも探索を重ね、後日に増補していくことを心懸けたい。

助数詞は、書簡模範文例集、即ち、往来物そのものにもみえている。それぞれにおいては、用例数は多いとはいえないであろうが、中には貴重な用例も散見している。また、今日の算数・数学の教科書に相当する

塵劫記の類にも、たくさんの用例がみえている。今後には調査すべき資料は少なくないが、考察のためには、各層、各年代の用例を必要とするというまでもない。

(注1) 助数詞を説かない書札礼もある。例、女書札調宝記一冊玉川大学蔵

本天明四年(一七八四)刊。

(注2) 例えば、女子文の手ひき全二冊架蔵本大正二年(一九一三)刊には、

「結納書式」として、「目録 / 一袴 老具 / 一勝男武士

賀 老連 / 一寿留女 老台 / 一子生婦 老台 / 一友志良

賀 老台 / 一家内喜多留 老荷 / 一末広 老対 / 右之通り

(下略)のようにみえている。